

美的判断の認知主義と美的性質

山田修司 (YAMADA Shuji)

東北大学

本報告では、美的判断についての認知主義 (cognitivism) と呼ばれる立場の議論を整理し、美的判断の客観性を擁護するために説明される美的性質の身分についての妥当性を検討する。近年の英語圏の美学において、美的判断の客観性を擁護する美学理論には、フォーマリズムと、その客観性の意味において対比される認知主義がある。認知主義は、特に環境美学の文脈において、判断の対象が自然物であるならば、「芸術作品として」ではなくまさに「自然として」の適切な認知に美的判断は基づくという主張がなされてきた。しかしながら、メタ倫理学の認知主義と同様あるいは類比的な理論枠組と照らして、美学の認知主義は十分に捉えられてはいない。特に、美的性質の身分について認知主義は、実質的にはフォーマリズムの美的实在論へコミットしているのではないかという批判もなされるように、理論的な一貫性に疑問がなげかけられている。

美的判断の認知主義は、道徳判断の認知主義と同様あるいは類比的に、性質の实在論と組み合わせられる傾向にある。しかし美学独自の問題の背景には、フランク・シブリーが先鞭をつけた「美的性質は非美的性質に依存する」という、美的性質を非美的性質との関係性において捉える問題意識が指摘できるだろう。美的性質の非美的性質への依存関係は、付随性 (supervenience) を用いて説明されることもある。ここに、美的性質についての素朴な自然主義はあらかじめ排除されているといえる。

美的判断の客観性をいうとき、一方で实在論は、心的に独立な「強固な (robust)」实在論または「強い」实在論と、心的に依存する「弱い」实在論というように分節化される。他方でより認識論的な文脈では、弱い实在論を受け入れる形で、認知の適切さに注目する。ここでは色の判断と類比的に語られる。フォーマリズムは強い实在論へ、認知主義は弱い实在論へコミットしつつ美的判断の客観性を主張する。

上記のようないくつかの整理をふまえて認知主義へ焦点をあてたとき、環境美学者のアレン・カールソンらによる科学的知識を必要条件とするような科学的認知主義 (scientific cognitivism) が「科学主義」とも批判される問題点がより明らかとなる。すなわち、認知主義での適切な認知とは、美的判断を説明するものであって正当化するものではないという、(美的性質が評価的な性質であるという前提のもと) 自然主義的誤謬を犯している問題があるのではないか。本報告により、美的性質の实在論的な身分から認知主義がフォーマリズムとの対比において美的判断の客観性を擁護するには不十分である点が示される。